

特集：新しいエイズ対策の展望

第二部：地域における先駆的エイズ対策の取り組み

2006年度世界エイズデーイベントの舞台裏

橋本康昭

東京都総務局行政部区政課課務担当係長
(荒川区福祉部介護保険課介護給付係長)

World AIDS Day Event 2006

Yasuaki HASHIMOTO

Department of General Affairs, Tokyo

抄録

- ・厚生労働省では2006年の世界エイズデーイベントとして、街頭キャンペーン、HIV検査、RED RIBBON LIVE 2006を開催した。
- ・これらのイベントは、行政、民間企業、医療関係者、NGOなど、HIV・エイズのまん延防止と差別・偏見の解消を願うさまざまな主体の連携により行われた。
- ・中でも、RED RIBBON LIVE 2006は、ラジオDJの山本シュウさんを総合プロデューサーに迎え、Mr.Childrenの桜井和寿さんやアンジェラ・アキさん、絢香さんなどのライブと、エイズ動向委員会からの呼びかけや陽性者の手記紹介などで構成された啓発ライブであり、メディアを通じた啓発や保健所等におけるHIV検査・相談の実績に大きな成果を残した。
- ・RED RIBBON LIVE 2006は実質2ヶ月という短期間で準備されたが、その背景には、関係者のHIV・エイズのまん延に対する危機意識と、実現に向けた強い意思があった。
- ・本文では、RED RIBBON LIVE 2006実現までの経過について、一担当者の所感を交えて紹介する。

キーワード：「できることを、できる範囲で、あきらめないで！」

1 はじめに

2006年、私は東京都から厚生労働省健康局疾病対策課に派遣されエイズ対策の普及啓発事業を担当した。エイズ予防指針における普及啓発の位置づけや厚生労働省が実施する事業の内容については、第一部「エイズ予防指針改正後のエイズ対策について」で述べられているところであるので割愛し、本稿では特に、私が担当した世界エイズデーイベントの実現までの経過報告を通じて、エイズ対策における普及啓発のあり方についての所感を述べたい。

拙稿の上、他の執筆者とやや趣が異なり情緒的な表現が多分にあるが、何卒、ご容赦いただきたい。

2 世界エイズデーとは

WHO（世界保健機関）は、1988年に世界的レベルのエイズのまん延防止とHIV感染者・エイズ患者に対する差別・偏見の解消を図ることを目的として、12月1日を“World AIDS Day”（世界エイズデー）と定め、エイズに関する啓発活動等の実施を提唱した。日本においても、その趣旨に賛同し、毎年12月1日を中心にエイズに関する正しい知識等についての啓発活動を推進している。

厚生労働省では、毎年、世界エイズデーのキャンペーンテーマを定めている（表1）。2006年は初めてテーマの公募を行い、「Living Together ～私に今できること～」を選定した。その趣旨は、「様々なセクシャリティ（性行動の

対象の選択や性に関連する行動・傾向)の人々や、HIV陽性の人々、陰性の人々が一緒に生きている現実をありのままに受け止め、エイズのまん延防止や差別・偏見の解消のために、ひとりひとりに何ができるかを国民全体で考えていく契機とする」というものであった。

HIV感染者・エイズ患者の年間新規報告数が過去最高を更新し続ける中、2006年は、感染者・患者への理解と支援を示す「レッドリボン」と、このキャンペーンテーマの下で、国や地方自治体、NGOなどによる様々なイベントが開催された。

表1 世界エイズデー・キャンペーンテーマ一覧(過去10カ年)

年度	テーマ
2006	Living Together ～私に今できること～
2005	エイズ…あなたは「関係ない」と思っていますか？
2004	“HIV”と“エイズ”の違い、知っていますか？
2003	「エイズ」知ろう、話そう、予防しよう
2002	「エイズ」目をそらさないで考えてみよう！
2001	I care…Do You ?
2000	エイズを知って あなたが変わる わたしも変わる
1999	若い命のためにも、聞いて学んで、エイズのことを
1998	時代が変わる、君が変える ～大切な人と生きるために～
1997	子どもたちの未来のために！今、エイズを考えよう

3 国の2006年世界エイズデーイベント

厚生労働省と財団法人エイズ予防財団が主催した2006年世界エイズデーのメインイベントは、11月28日に渋谷で行われた街頭キャンペーン、HIV検査、RED RIBBON LIVE 2006の3つである。街頭キャンペーンは学生を含むNGOやボランティアを中心にハチ公前で啓発グッズや予防に有効なコンドームを配布した。特に、後述するRED RIBBON LIVE 2006の準備の過程でイベントに参画した松竹芸能株式会社のマネージャーのご尽力があり、所属タレントのアメリカザリガニさんやT・K・Oさんをはじめとする若手芸人20名あまりの皆様にもボランティアで参加していただき、街行く渋谷の若者にエイズ予防をPRした。またHIV検査は、渋谷区保健所の出張検査として、国立国際医療センターエイズ治療・研究開発センター(ACC)を中心に、神奈川県衛生研究所のご協力を得ながら約100名の即日検査を実施した。特設会場での検査は、会場設営をはじめ、プレカウンセリングから結果返しまでの導線づくり、偽陽性が出た場合の対応など、非常にきめ細かな準備が必要となる。世界エイズデーのHIV検査は2004年から3回目を数えるが、毎年ACCの医師、看護師の皆様、神奈川県衛生研究所の皆様の多大なるご協力の下で行われ、当日検査を受診された方々だけでなく、報道等を通じて多くの国民への検査受診のPRを図るイベントとして成功を収めている。2006年度は、代々木体育館に隣接するイベント会場で渋谷駅から距離があったが、街頭

キャンペーンを行っている渋谷駅周辺で勧誘を行い検査に誘導した。街頭キャンペーンと検査の様子はNHKなどでも報道され、12月1日に先駆けて全国の地方自治体の取組みを後押しすることができた。

街頭キャンペーンとHIV検査は、それぞれ、感染予防と検査受診を訴える国のエイズデーイベントとして、また、エイズ対策に関わる各主体の連携を示す場として欠かせないものとなっている。

さらにこの年、厚生労働省の主催としてはおそらく過去に類をみない大イベントが誕生した。それがRED RIBBON LIVE 2006である。

4 RED RIBBON LIVE 2006

(1) 官民協働の一大プロジェクト

SHIBUYA-AXで開催されたRED RIBBON LIVE 2006は、プロデューサー兼MCにラジオDJの山本シュウさん、出演はMr.Childrenの桜井和寿さん、GLAYのTERUさんとTAKUROさん(ビデオ出演)、アンジェラ・アキさん、絢香さん、一青窈さんなどのアーティスト、在京FM・AMラジオ局のDJ、スポーツ選手、お笑い芸人、俳優、厚生労働大臣(ビデオ出演)も出演し、まさに組織や立場を超えて心からHIV・エイズのまん延防止を願う方々が集結した。出演者全員とスタッフの大半はボランティアで参加し、無料招待された観覧者、スタッフなどを合わせて1,600人あまりが参加する歴史的なイベントとなった。(図1、表2)

今回のライブの特徴のひとつは、エイズ予防啓発ライブとしての構成を徹底した点にある。陽性者の手記をラジオDJに朗読していただいたり、厚生労働省エイズ動向委員



図1 RED RIBBON LIVE 2006

AMUSE INC.

表2 RED RIBBON LIVE 2006 開催概要

- 主催
厚生労働省、財団法人エイズ予防財団
- 開催日
平成18年11月28日(火) 18:30～
- 開催場所
SHIBUYA-AX
- 総合プロデュース・司会
山本シュウ(ラジオDJ)
- 実施内容
- 1 エイズ予防啓発ライブ
絢香, アンジェラ・アキ, 桜井和寿 (Mr.Children), SHAKALABBITS, 一青窈, 山田耕平 with アフリカンバンドほか
 - 2 日本の HIV・エイズの発生動向と予防対策等について(エイズ動向委員会委員長)
 - 3 シンポジウム(ラジオDJ, スポーツ選手, お笑い芸人, 俳優ほか)
 - 4 ラジオDJによる HIV 感染者等の手記紹介
 - 5 著名人によるビデオコメントの紹介(厚生労働大臣, GLAY (TERU, TAKURO) ほか)
 - 6 著名人によるメッセージパネルの展示
 - 7 (財)エイズ予防財団・NGOによる啓発ブースの設置



図2 Yahoo! JAPAN 12月1日のトップページとレッドリボンキャンペーン

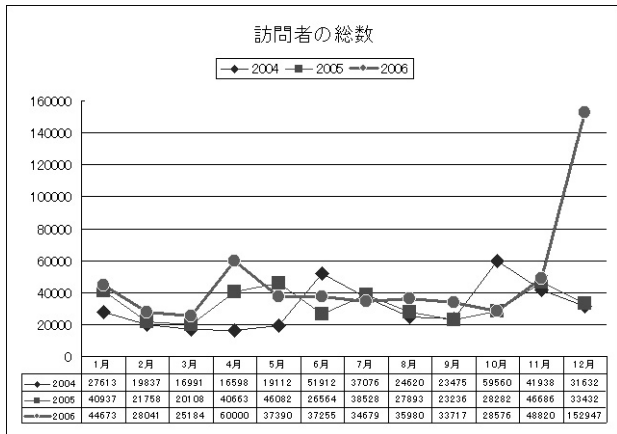


図3 エイズ予防情報ネットの訪問者数

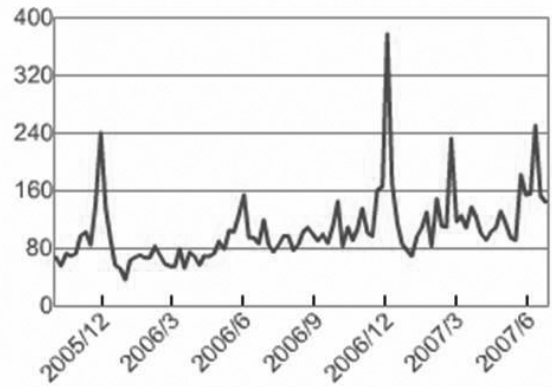


図4 Yahoo! JAPAN における「エイズ」を含むブログ件数の推移

会委員長に動向委員会として国民に訴えるべく舞台上がっていただくなど、事実や正確な情報を伝える演出を重視した。また、出演される方には、正しい知識を持った上でご自身のことばでメッセージを発信していただくために、事前に発生動向や国の施策に関する資料、啓発用映像などを提供してご準備いただいた。

もうひとつの特徴は、メディアとの連携である。Yahoo! JAPAN の啓発特集であるレッドリボンキャンペーンと連動し、感染経路などの知識に関する情報や地方自治体の検査・相談案内などとともに、多くの著名人の啓発メッセージやライブの映像、陽性者の手記などをインターネット上で公開した。Yahoo! JAPAN はレッドリボンキャンペーンをトップページで告知し、12月1日には「Yahoo! JAPAN」のロゴの直下に「12月1日は世界エイズデー」を掲げて、特集にダイレクトに誘導した(図2)。さらにエイズ予防情報ネット(厚生労働省がエイズ

予防財団に委託する情報サイト)には、GLAY が公式サイトにリンクを貼ってくださったり、他の何人ものライブ出演者が自身のサイトで紹介したりしてくださったこともあり、2006年12月の訪問者数は前年の約5倍となった(図3)。また、ラジオでは、在京FM・AM10局でのライブの事前告知と同時に感染予防や検査受診のメッセージを発信してリスナーへの啓発を行ったほか、各局DJのイベントへの参加を通じてラジオメディアに関わる方々への啓発を展開した。さらに、記者会見とライブは、新聞、テレビ、雑誌、音楽系のインターネットメディア等に多数取り上げていただいたほか、インターネット上では感染予防などに関する任意のブログが行き交った(図4)。

メディアと連携することにより、国民に対して相対的に認知の機会が提供された結果、2006年第4四半期の保健所等における検査件数は前年比約26%、相談件数は前年比約21%の増となり、年間の検査件数は前年比約16%増

の116,550件となった。

行政だけでは到底なしえないこのようなイベントがどのような経緯で開催されたのか、そこに至るまでの舞台裏をご紹介します。

キーワードはただ一つ、今回のライブを通じて山本シュウさんに教えられたことば、「できることを、できる範囲で、あきらめないで！」である。

(2) それは Yahoo ! JAPAN から始まった

Yahoo! JAPAN は、1日約12億ページビューの閲覧を有する、日本のインターネットメディアを代表する企業である。Yahoo ! JAPAN が企業の社会的責任 (CSR) に関する取組みのひとつとしてエイズ予防の啓発特集を始めたのは、2004年の世界エイズデーのときであった。レッドリボンキャンペーンと銘打って始まったこの特集の中で、2005年、長年自身のトークライブなどでエイズ予防の啓発を続けていた山本シュウさんのライブトーク企画「日本緊急事態宣言」が立ち上がった。そしてそのゲストとして招かれたのが GLAY の TERU さんであった。

一方、厚生労働省では、2006年の4月に改正エイズ予防指針を施行し、6月1日から7日の HIV 検査普及週間が創設された。第一回の検査普及週間は、東京都南新宿検査相談室をお借りして、厚生労働副大臣と日本エイズストップ基金の運営委員である女優の田中好子さんの記者会見を行い、感染予防と検査受診を呼びかけた。このときも Yahoo ! JAPAN ではレッドリボンキャンペーンが展開され、前回同様にホストを山本シュウさんとし、アーティストのアンジェラ・アキさん、NBA の田臥勇太さんなどがゲストとして啓発トークを行った。このとき私は Yahoo ! JAPAN の担当者からのご相談をいただき、誤った情報を流したり不適切な表現を使ったりしないよう助言させていただく立場で、エイズ予防財団の担当者とともに収録に立ち合った。

RED RIBBON LIVE 2006の実現は、このときのシュウさんとアンジェラさんのトークが直接のきっかけである。お二人ともアメリカでの生活を経験しており、日本とアメリカのエイズに対する国民の意識の違いに大きな危機感を感じていた。国の責任に言及しながらも、アーティストのように社会にメッセージを発信することができる立場の人々が立ち上がり、曲やライブを通じて本気で啓発していかなければ、エイズがまん延して取り返しのつかないことになる、国なんかには任せてはられない、まずは自分たちが立ち上がらなければならない、という趣旨のトークが展開された。私は近くでトークを聴いていて、お二人の社会的意識の高さに敬服すると同時に、その政策としての効果を想像した。若年層に影響力のあるアーティストからライブという形式で発信されるメッセージが生む啓発効果は絶大である。しかもそれは民間の自発的な意思だけで行われるのではなく、官民が協働して少しでも多くの組織や個人を巻き込み、エンターテインメントを超えて政策としての

啓発ライブを開催することに大きな意義があった。厚生労働省内でも、限られた予算の中でも何とかして大きなイベントを開催し、国民ひとりひとりの意識に届く啓発をしたいという思いが常にあったため、私は、シュウさんやアンジェラさん、Yahoo ! JAPAN の担当者の熱い思いに突き動かされながら、省内外の皆様のご意見をいただきつつ国が主催する啓発ライブの実現に向けてシュウさんへのご相談を続けた。

(3) シュウさんとの約束

相談の過程でシュウさんに言われたこと、それは、「丸投げは許さない」だった。国民に啓発が行き届いてない責任は国にある、それなのに予算だけ用意してあとはよろしくということであれば、自発的な意思で出演してもらおう方々に申し訳が立たない、ライブの成功に向けて厚生労働省として本気で関わらなければ、この企画には絶対に乗らないし、いつでも降りる、というのがその趣旨だった。行政には委託の予算が組まれており、今回のようなイベントはノウハウを有する企画会社に一括して事業委託される場合が圧倒的に多い。委託の場合、企画書の作成からイベントの開催に至るまですべて受託業者が行い、行政はそのクライアントとして政策目的に合致したイベントになるよう受託業者に指示を出す。これが一般的な方法である。しかしシュウさんはそのような方法を許さなかった。もちろん契約上は事業委託の形式になるが、形式ではなく実質において、組織としてではなく同じ人間として心を通わせて必死になってやる覚悟がない人たちとは仲間になれないしそんな啓発は誰にも届かない、それがシュウさんの考え方であり、やり方であった。

私個人としては、シュウさんをお願いした時点で、ライブが実現するまではしがみついて離すまいと心に決めていた。啓発効果を一過性で終わらせないためには、人々の心に強く残り翌年の世界エイズデーを心待ちにするようなイベント、普及啓発事業の基盤としてのネットワークができて自然に啓発が普及していく契機となるようなイベントを開催しなければならぬと感じていた。シュウさんとの話し合いの段階で、何名かの著名な方々への打診や相談が進められていることを伺っており、その錚々たる方々が、国が主催する啓発ライブでエイズ予防のメッセージを発信している映像を思い浮かべるにつき、余力を残して関わるようなレベルの話ではないことを私は強く認識していた。水面下での調整を厚生労働省内に逐次報告していたが、国としても意思は同じであった。

こうして、数回にわたるやりとりを通じて意識確認を経たのち、RED RIBBON LIVE の種がシュウさんのマネージャーの来省というかたちで確実な芽を出したのは、シュウさんとアンジェラさんのトークから4ヶ月あまりを過ぎた頃であった。著名な方々にとって、特にメディアに関わる方にとって、国の政策の真ん中に立って采配を振るうことに伴うリスクがどれだけのものかは想像に難くない。

しかしシュウさんは、覚悟を決めてくださった。

(4) ライブへの始動

シュウさんのマネージャーが厚生労働省を訪れたのは9月半ばであった。この日を境に、実質2ヶ月という短期間でライブを実現すべく本格的に動き出すこととなる。シュウさんの所属事務所である株式会社アミューズで週一回行われることになった会議には、シュウさんを信頼する様々な立場の有志が集まった。主要メンバーは、山本シュウさん、シュウさんのマネージャー、Yahoo! JAPANのレッドリボンキャンペーン担当者、松竹芸能のマネージャー、ライブ運営会社のスタッフ、デザイナー、フリーアナウンサー、厚生労働省とエイズ予防財団の職員等々である。このメンバーを中心として、厚生労働省が作成した企画書をベースに検討を重ね、週一回の会議と不定期かつ頻繁に行われる分科会において、メンバーが所属する組織の事情に配慮しつつ、それぞれの価値観や方法論の違いを競合させながら、浮かんでは消えるいくつものアイデアを収斂させていった。

最終的に決まったライブの方向性は、①完全無料招待制とし、各ラジオ局、Yahoo! JAPAN、エイズ予防情報ネットで招待枠を配分しそれぞれで募集を行う、②ラジオ局とラジオDJにご協力いただき、公開ラジオ番組風にする③音楽アーティストだけでなく、様々なジャンルから本気で啓発する意思のある方だけに出演していただく、④トークとライブを組み合わせ、正しい知識と情報を発信する⑤陽性者の声を届ける、⑥厚生労働省で記者会見を行いマスコミに協力を呼びかける、などであった。これらの方向性を踏まえながら、多岐にわたる懸案をひとつずつ検討し、ライブの全体像を固めていった。

事前準備は時間との闘いであった。関係者用の啓発映像やパンフレットの作成、当日参加できない多数の著名人のビデオコメントと写真の撮影、後述するオリジナルソングのCDやジャケット作り、会場に展示するメッセージボードのデザインなどもすべて、シュウさんの相談を受けて協力を買って出たプロフェッショナルの手によって進められた。開催まで1ヶ月を切る頃には舞台演出や音響関係の方々も加わるようになり、連日連夜、試行錯誤を繰り返しながら作業が進められていった。エンターテインメントの演出をされている方々の創造性や集中力やこだわりの強さには、本当に敬服させられた。彼らは、ライブとしての娯楽性と啓発事業としての社会性の微妙なバランスを均衡させながら、それぞれが持ちうるプロの能力をそれぞれの部分で発揮された。ライブ実現の裏には、プロの方々の仕事に対するプライドや、商業主義だけに偏らない公的な使命感があった。その意識がシュウさんへの信頼という共通項で結ばれ、短期間のうちに成熟したプロジェクト・チームに発展していった。

また、私はこれらの作業と併行して、事前にシュウさんから協力を打診した在京AM・FMラジオ局にシュウさん

のマネージャーとともに伺い、厚生労働省として協力を要請した。シュウさんからの説明を受けていた各局の編成責任者の方々も強い問題意識を持っており、積極的に要請に応じてくださった。

こうして、それまで関わりのなかった人々が集まり、ときには激しく議論しながらも目的をひとつにして密度の高い時間を過ごしていくうちに、雲をつかむような話が徐々に現実味を帯び、やがて私たちは啓発ライブとしての成功を確信していった。

(5) 「1日3人」

時期が前後するが、イベントの約1ヶ月前に厚生労働省でライブの告知を兼ねた記者会見が行われた。シュウさん、アンジェラさん、疾病対策課長、エイズ予防財団専務理事が出席した会見では、シュウさんから、日本のHIV感染者が毎日3人ずつ増え続けていること、その事実を85%の人が知らないこと（Yahoo! JAPANによる調査）などが説明された。また、アンジェラさんからも、国民に現状を知り予防してもらうために自分ができることとしてライブに参加する旨が表明された。シュウさんとアンジェラさんは会見の後に厚生労働大臣を訪問してライブへの参加とエイズ対策の充実を要請し、大臣は公務のためライブに出席できない代わりにビデオコメントを寄せる約束を交わした（図5）。

なお、ここに述べたように、今回のイベントでは「1日3人」という表現を多用した。ただし、厳密に言えば「日本のHIV感染者の新規報告数は1日あたり約2人、エイズ患者の新規報告数は1日あたり約1人、あわせて1日あたり約3人」ということになる。しかもHIVは潜伏期間で平均10年から15年、エイズに至っては発症してから初めて分かる症例が新規報告であるためいつ感染したかはほとんど分からない。つまり、現在1日3人が感染し続けているということを事実としては証明できないのである。しかし、人の意識や行動を変えようとする政策目的を優先する普及啓発事業においては、耳に残るインパクトのある簡潔明瞭なキャッチフレーズをいかに有効に使うか



図5 記者会見後の大臣訪問の様子
(左から、アンジェラ・アキさん、柳沢前厚生労働大臣、山本シュウさん)

が大きなポイントになる。実際に、「1日3人」に衝撃を受けて啓発に参加して下さる方々は非常に多かった。ちなみに、平成18年5月にエイズ動向委員会が発表した平成18年の発生動向に関する委員長コメントでも「1日あたり3.7件」という表現が使われた。

(6) 生まれ来る子供たちのために

ライブへの準備が始まってすぐにメッセージソングを制作する話が持ち上がった。シュウさんと出演アーティストの強い思いから選ばれた曲は、この国と、この国の子どもたちの将来を思い、愛する人を守ることの大切さを伝える曲「生まれ来る子供たちのために」であった。1980年に小田和正さんが作詞・作曲したこの曲をケツメイシのプロデューサーである YANAGIMAN さんがアレンジし、TERU さん、桜井和寿さん、絢香さんなどによって、「RED RIBBON LIVE 2006 スピリチュアルソング 生まれ来る子供たちのために」に生まれ変わり、TERU さんのレコーディングを皮切りに、まさに曲が成長するかのごとく次々とアーティストの本気の思いが吹き込まれていった。記者会見を経てライブの開催が公表されてからは、各ラジオ局でライブの告知に合わせてこの曲がオンエアされた。私は、シュウさんに同行していくつかの局のオンエアに立ち合わせていただいたが、オンエアそのものが啓発となってリスナーの意識に伝わった。もちろんすべてがシュウさんに共鳴したアーティストの方々、各ラジオ局の方々の本気の思いから実現したことである。

こうして、シュウさんを慕い、HIV・エイズのまん延防止を願う多くの人々が寝食を忘れ、汗と涙にまみれた2ヶ月間を経て、RED RIBBON LIVE 2006は開催された。厚生労働大臣のビデオコメントで幕を開け、ライブとトークが交互に展開されたのち、サブライズゲストとして登場した桜井和寿さんのライブに続いてフィナーレとして用意された「生まれ来る子供たちのために」は、出演者全員と、無料招待された一般の方々、街頭キャンペーンやHIV検査にご協力くださった皆様、ボランティアで関わった多くのスタッフなど、会場にいるすべての方々の思いを乗せた大合唱となった。シュウさんのはからいで厚生労働省の主要なスタッフもステージに上げていただいた。私は、「愛する人を守りたまえ」と繰り返すたくさんの温かい歌声に向かって大きく手を振りながら、夢と現実の間にいるような朧げな眼差しでその光景を見つめていた。

5 できることを、できる範囲で、あきらめないで!

行動変容を促すことを目的とする普及啓発は、ひとりひとりの意識に伝わってはじめて政策として実行したことになる。しかしながら行政だけでは人の心に伝える強いメッセージを発信できないのも事実である。だからこそ行政は、メッセージを伝える力を持つ民間の組織や個人と協働

し、その方々が有している公の意識をお借りしながら、人々の心に届く普及啓発事業を政策としてコーディネートしていかなければならない。

啓発された結果として保健所や医療機関で検査を受診し、陽性であることが判明した方々は、ACC、中核拠点病院、拠点病院を中心としたHIV医療従事者によって適切な医療を受け、ケア・サポートを行う多くのNGOやボランティアの支援を受ける。同時に、たくさんの組織や個人によって、様々なセクシャリティの方々やHIV陽性の方々と一緒に生きている現実をありのままに受け止める社会を築くための啓発が繰り返される。すなわち、世界エイズデーイベントをはじめとする普及啓発は、まさにレッドリボンの交差する部分に位置するかのごとく、予防、検査受診の奨励と検査体制の整備、適切な医療の提供、差別・偏見の解消というエイズ対策の一連の施策目標をつなぐものであり、そのリボンを形成するのは、国、地方自治体、民間の組織や個人、医療機関、NGOなど、すべてのエイズ対策関係者の「できることを、できる範囲で、あきらめないで!」取り組もうとする真摯な思い以外の何物でもない。

「人」が何かを憂いて本気になったとき、組織の壁はたやすく越えることができる。すべてひとりだけでやる必要はない。組織が有する沈黙の傘の下に隠れるのではなく、社会を構成する「人」が与えられた役割に正面から向き合うことこそ大切なのである。私はそのことを、シュウさんや出演者の方々、Yahoo! JAPANの担当者、松竹芸能のマネージャーなど、たくさんの有志の方々に教えられた。もちろん行政として関与する以上は自己満足に終わってはいけない。著名な方々に対しても、参加していただく以上はHIV・エイズに関する正しい知識をきちんと伝え、差別や偏見、私利私欲を持たずに関わっていただかなければならない。その上で、今回のようなイベントが、HIV・エイズのまん延防止に寄与する政策として有効でなければならぬし、その評価は一義的には厚生労働省に設置するエイズ施策評価検討会においてなされ、さらにはマスコミを通じた世論の動きによって測られ、医療関係者をはじめとする現場の方々の声によって伝えられ、地方自治体の検査・相談件数の実績として現れる。

今回のライブは、公費を投じて事業を実施する行政が関わることで、エンターテインメントの枠を超えて大きな社会性を帯び、その運営には今回ご紹介できない部分も含めて様々な制約や障害が伴った。しかし、国民をHIV感染から守り陽性者を差別や偏見から守る責任が行政にある以上、より効果的な政策を模索し、「できることを、できる範囲で、あきらめないで!」その政策を実現させていくために前進する以外に何ら近道は存在しない。

私は、RED RIBBON LIVE がわが国の世界エイズデーの象徴として、また、生まれ来る子どもたちのために将来を憂う人たちの立場を超えた本気の結晶として、これからも真冬の空の下で人々の心を赤く染め上げる奇跡であり続

けることを願ってやまない。

6 おわりに

PPP（パブリック・プライベート・パートナーシップ）という考え方がある。行財政運営の制度論であるが、その底流にある理念は、官民の対等な協働関係の下で、できることをできる範囲で分担し合いながら効率的に社会的資源を活用していくことであり、その恩恵を受けるべき対象は、納税者たる国民や住民であり、消費者である。

今や行政には成果主義や顧客主義に基づく戦略的経営が求められ、民間企業は社会的責任の遂行なくしては市場の信頼を勝ち得ることができなくなった。つまり、もはや官（公）か民かではなく、資源配分の最適化に向けて両者の連携のかたちをいかに確立していくか、更に言えばそれぞれの組織を構成する「人」が、いかに国民本位、消費者本位の認識を共有し理解を深め合っていくかが重要であり、それは永続的な社会を築くために私たちが解決すべき命題でもある。

本当に小さな一歩かもしれないが、2006年の世界エイズデーイベントは、その認識共有と相互理解を最後まで貫いて具現化されたものであったと確信している。

最後にあらためて、イベントの実現にご尽力くださった

山本シュウさん、たくさんの出演者の皆様、アミューズを始めとするライブスタッフの皆様、Yahoo! JAPANの皆様、松竹芸能の皆様、ACCほか医療関係者の皆様や多くのNGO、ボランティアの皆様、今回寄稿の機会を与えてくださった国立保健医療科学院の皆様、そして、2006年の1年間を通じて数々の得がたい貴重な経験をさせていただいた厚生労働省に、この場をお借りして心から感謝を申し上げたい。

（参考）

山本シュウ

1964年大阪府門真市出身。アミューズ所属。ニックネームはレモンさん。主にラジオ番組のDJや、テレビ番組の司会などで登場。また、毎日小学生新聞や、教育技術の本などでコラムを執筆。現在はFM-FUJI「SATURDAY STORM」FM大阪「SHOO POWER REQUEST」「SHOO POWER CAMP」のDJや、日本テレビ系全国ネット「カートゥン KAT-TUN」のナレーションを担当。山梨英和大学や大阪大学での講師なども務める。PTA活動のドキュメントとコラムをまとめた「レモンさんのPTA爆談」が小学館から発売され話題となっている。